

都の食材

—平安京右京七条一坊七町跡の調査成果から—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した「小魚口」木簡



写真2 出土したアワビ



写真3 出土したハマグリと考えられる二枚貝

はじめに 2024年4月から5月に京都市中央卸売市場第一市場の施設整備に伴って発掘調査を実施しました。当地は、平安京右京七条一坊七町跡にあたり、北は左女牛小路、東は西坊城小路、南は七条坊門小路、西は皇嘉門大路に画されています(図1)。

七町の居住者や施設利用については、史料上では確認できません。『拾芥抄』西京図によれば、七町に近接する三・四町には、外国使節を迎えるための西鴻臚館が存在し、九・十町には、11世紀に権中納言源経信の所領が存在しました。また、十三・十四町は、西市の外町にあたります。

調査地は平安京の官営市場である西市にほど近い場所に位置していました。西市は平安時代中期以降は衰退し、姿を消しますが、昭和2年(1927)に京都市中央卸売市場が開設され、当地周辺は再び京都の食生活を支える場所となり、現代に至ります。

平安時代前期の井戸を発見 調査では、江戸時代に行われた粘土採掘のために古い時代の遺構はほとんど失われていることがわかりましたが、平安時代前期の井戸が残されていました(写真4)。井戸は深さ約1.7m、木枠の一边の長さは約1.1mあり、これは一辺0.9mの標準的なサイズの井戸よりもやや大

きいものです。井戸枠内からは、9世紀前半の土器が出土しました。このことからこの井戸は、平安京遷都後、間もない時期に使われていたことがわかりました。

「小魚口」木簡の出土 この井戸からは、遺存状態が良好な木簡・斎串・箸・櫛・曲物等の木製品も出土しました。木簡には、片面に「小魚口」の墨書があります(写真1)。残念ながら墨が薄く、口の文字は解読できませんでした。大きさは、長さ4.8cm・幅1.6cm・厚さ0.3cmと小型で、短冊形をしています。樹種はヒノキです。木簡の上下には左右から切り込みが入れられています